



↑平成5年の台風7号の影響で裂けた幹の根元。



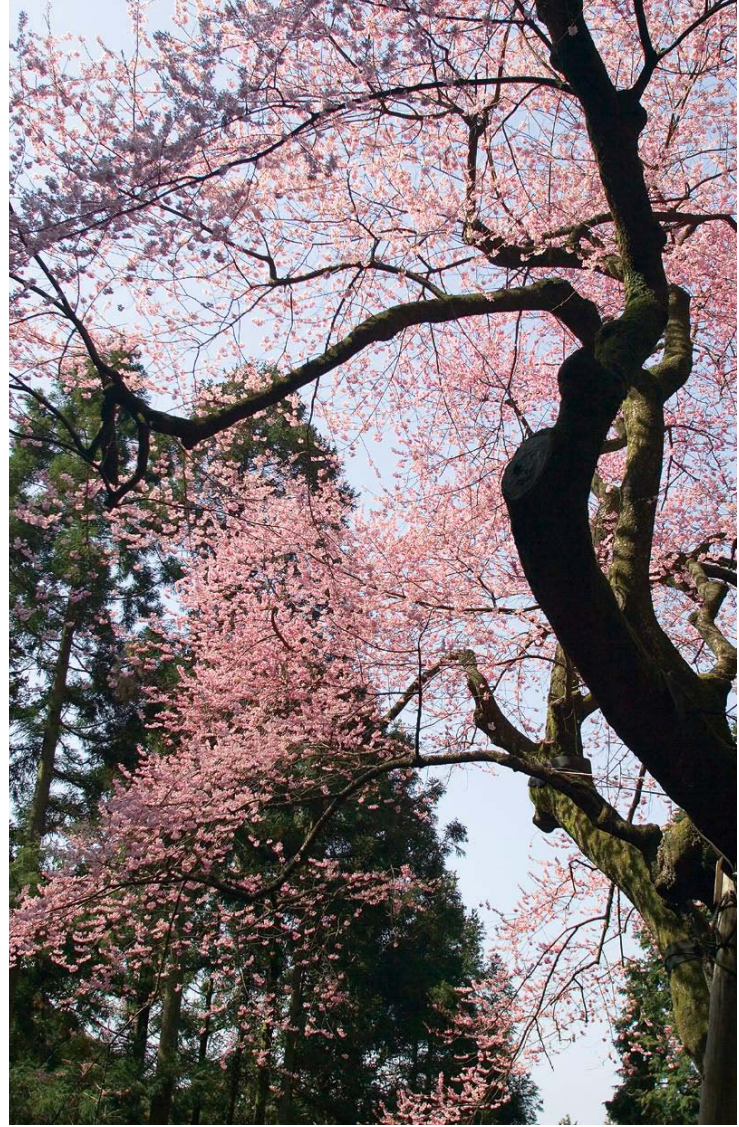
↓平成3年の台風17号で落ちた虎尾桜の大枝、104の年輪があった。



↑幹にある大きなコブは傷口から菌が入った「ガン腫瘍」によるもの。



↑緩やかな弧をえがき、トラのしっぽを連想させる虎尾桜の枝先。季節で表情を変えながらも常に幽玄な雰囲気を漂わせている。



枯死救う桜守

奮起

大樹が生命の力を蓄え、渾身の力で開花します。六百年も絶え間なく営まれてきた自然の美しさ。守り救うために立ち上がった人たちがいました。

る直撃は、一本の大枝をふるい落としました。そのつめあとが癒えないまま迎えた平成五年、またもや大型の台風七号による強風は巨木がよじれるほどの威力でした。ついに根元に大きなひびが入ります。支柱を取り付けていたため、木が倒れることは免れましたが、致命傷とも言える幹の亀裂は、とても深刻なものでした。「もう一度台風が来たら倒れてしまう」。絶体絶命の危機に直面した会員は、専門家と相談し、ワイヤロープで巨体を引き上げます。幹が揺れないように固定し、腐った部分にウレタンを詰め、腐食の進行を防ぎました。しかし、会員らの身を粉にした努力にもかかわらず、回復の兆しは期待するほど見えませんでした。打つ手のないまま、月日だけが流れていきます。「もうこのままダメかもしれない」。だれもがそんな気持ちになっていききました。転機が訪れたのはそんなときでした。

もう一つの桜物語



墨染の桜

上野の古刹・興国寺に「墨染の桜」がある。九州に落ちのび、ここで再起を図った足利尊氏は、つばみのついた桜の枝を切り、逆さに地に挿して「今宵一夜に咲かば咲け 咲かば咲け 世も墨染の桜かな」と今後の戦運を占った。桜は一夜にして咲き、その勢いで尊氏は京に上り室町幕府を開いた…という伝説が残されている。興国寺文書には、この桜にまつわる細川幽斎、小笠原忠真の詠歌もある。歴代藩主に拝した「墨染の桜」は、境内にある彼岸桜と同じく、当初はエドヒガンであったと推察されており、今は世代交代を経て、若木が植えられている。



「診断書には『倒れる危険性がある』と書きました。枝にはキツキがついた跡がいくつかありましたが、これは中が



宇佐美 陽一さん

樹木医。築上町の「本庄の大楠」など国の天然記念物の治療を手がけている。(北九州市八幡西区)

腕利き樹木医が見た光明

「地元近くで腕利きの樹木医がいる」。そんなうわさを聞いた事務局の小林さんは、ためらうことなく連絡を取りました。宇佐美陽一さん（北九州市、国の天然記念物も手がける評判の樹木医でした。平成十一年、会員の総意で宇佐美さんに虎尾桜の診断を依頼します。宇佐美さんは木に登って隅々まで診断。そこで枝について大きな傷を発見しました。かつて周囲にあった杉とこすれてついた傷です。木が枯れていく大きな原因のひとつでした。

腐って虫がいるという証。一見大丈夫そうに見えても内部では腐食が進んでいました」と宇佐美さんは説明します。そんな中、宇佐美さんは先の方が枯れた大枝の生き残った部分から、新しい枝が生えていることに気づきます。診断の中で見いだした一つの光明でした。「どこかが枯れてると、その部分を補おうとして芽が出てくる…。虎尾桜にまだ強い生命力があるのを感じました。やれば助けられると思えましたね」。樹木医・宇佐美陽一さん、桜守の力強い助っ人が動き出した瞬間でした。

幹を裂く台風の猛威



↑初期の周辺整備。会員総出で下草を刈り、その後、虎尾桜を覆っていた杉を伐採した。